



相原 志保

やればできるこJAPAN
取締役会長兼CEO

いつまでも 初心を忘れずに

社会人を長く続けていると、いつの間にか初心を忘れて、日々の課題の積み重ねに視野が奪われる感覚に落ち入る。

コロナ禍で海外渡航が制限される数年前に、古くから香港で親交のある友人から紹介されたスチュワート氏に会うため、初夏のスコットランドに向かった。珍しく暑い夏となったロンドンから涼しいエジンバラへ移動すると、スチュワート氏が満面の笑みで迎えてくれた。

この旅の目的は、80歳を迎える彼が幼少の頃から夢見ていたウイスキー蒸留所の現地視察である。エジンバラからゴルフ発祥の地、セントアンドリュースへ向かう途中に、ファルカークという町がある。スコットランドのシングルモルトウイスキー産地としては珍しくローランド地方に位置している。この地で20年以上前に閉鎖された名門ブランドを復活させるべく、10年以上の月日をかけて創業の地と水源を買い取り、新しい蒸留所の免許を申請したという。なんと気分の遠くなる話だが、自身が起業した家電量販事業を息子に譲り、ニュー

ヨークから帰国した娘と夢の実現に心躍る日々だという。

80歳を過ぎても、初心を忘れずにチャレンジする姿に深い感銘を受けた。投資事業や企業再生など、創業とは対極の仕事に従事してきた私が、いつかは子どものころから夢見ていた飲食業を起業しようと心に決めた瞬間である。年齢は関係ない、何がやりたいかだよ、というスチュワート氏の笑顔が忘れられない。

余談であるが、エジンバラのスコッチウイスキー協会で、正しいウイスキーの飲み方や選び方を教わった。どれも目からうろこであるが、ここでは誌面に限りがあるので、詳しくは皆さまに直接お会いした際に、ウイスキーを片手に語りたい。

最後に、昨年6月にスチュワート氏が1,000樽目の封をする記事を読んだ。元気な姿に安堵するとともに、コロナ禍でも夢をかなえる人の姿は美しいと思った。一日でも早くコロナ禍が明け、初出荷のお祝いにスコットランドへ戻りたいと思う今日この頃である。



蒸留所を立ち上げたジョージ・スチュワート氏(左)と筆者



建設中のファルカーク蒸留所内部



スコッチウイスキー協会が所蔵する個人蒸留所のシングルモルト